

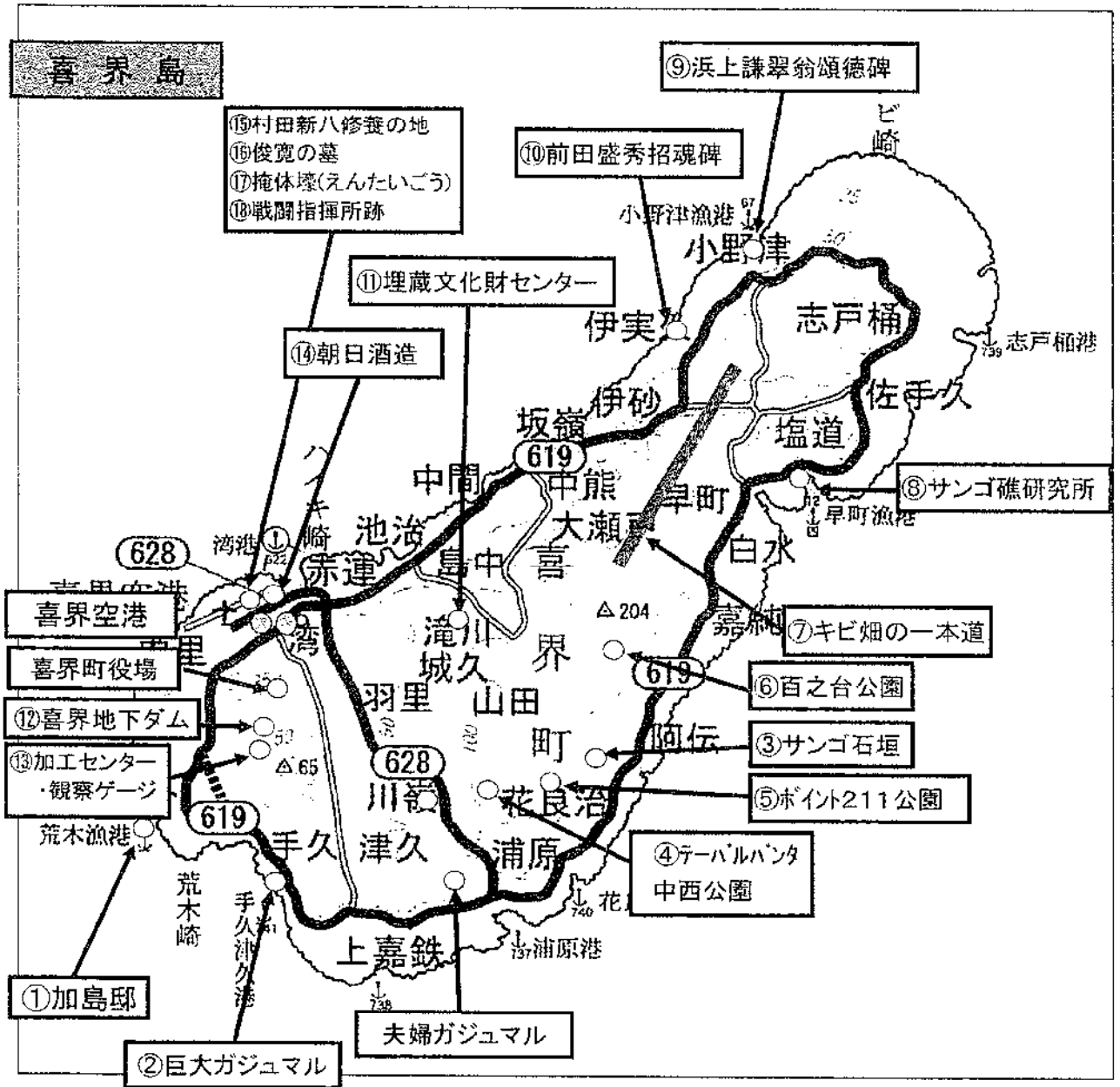
資料 5 . 学生配布資料 (2)

喜界島観光現地視察資料

H30.9.25 現在

1	加島邸庭園	1
2	巨大ガジュマル (手久津久集落)	2
3	サンゴの石垣 (阿伝集落)	3
4	テーバルバンタ	4
5	ポイント211公園	5
6	百之台	6
7	キビ畑の一本道 (伊実久)	7
8	特定非営利活動法人 喜界島サンゴ礁科学研究所	8
9	浜上謙翠翁頌徳碑	9
10	前田盛秀招魂碑	10
11	喜界町埋蔵文化財センター	11～15
12	喜界地下ダム (国営かんがい排水事業)	16
13	喜界町農産物加工センター	17
14	株式会社 朝日酒造	18
15	村田新八修養の地	19
16	俊寛の墓	20
17	掩体壕	21
18	戦闘指揮所跡	22

喜界島視察等位置図



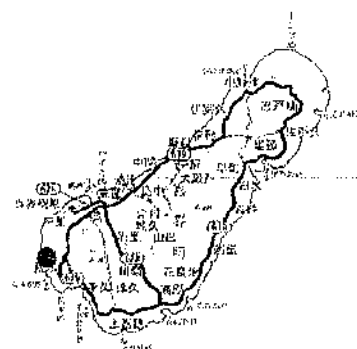
加島邸 (オオゴマダラ, アサギマダラ)

(喜界町)

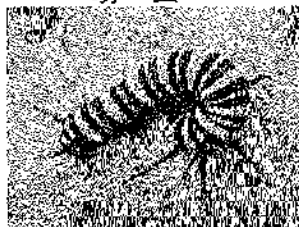
オオゴマダラ蝶は、マダラチョウ科で、羽には白地に黒のマダラ模様、羽を広げると15センチメートルもある大型の美しい蝶で優雅に舞う姿から“南の島の貴婦人”とも呼ばれている。

食草のホウライカガミ (キョウチクトウ科) とともに、喜界島が北限と見なされている。

町は「オオゴマダラ保護条例」を制定。平成元年3月24日に公布した。



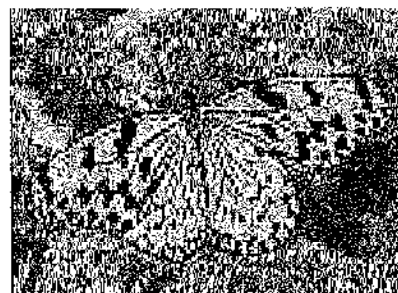
幼虫



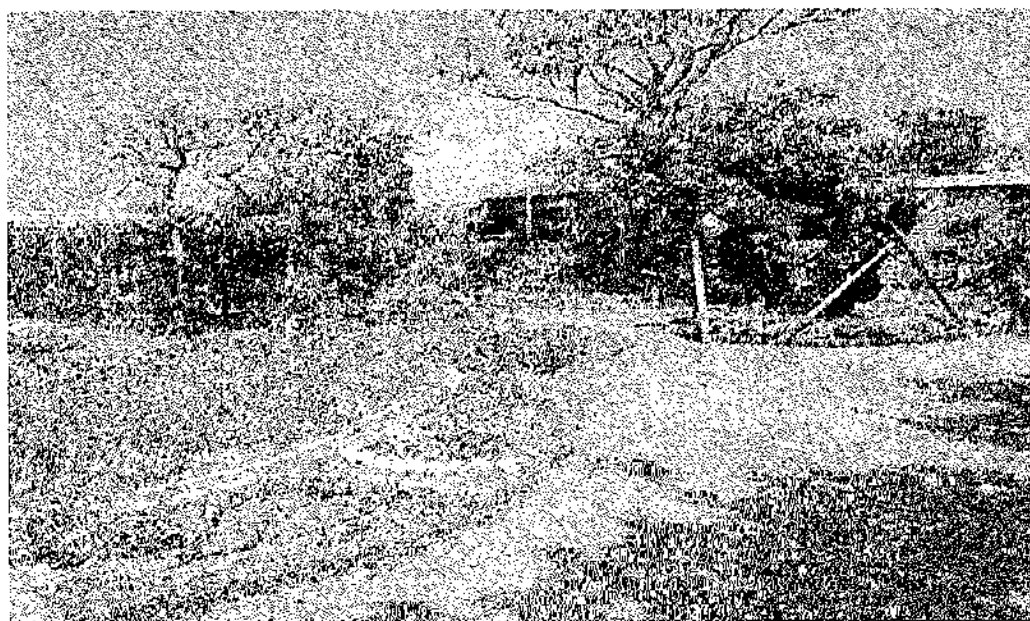
金のサナギ



成虫



○加島邸 (外観) 所在地：喜界町大字荒木

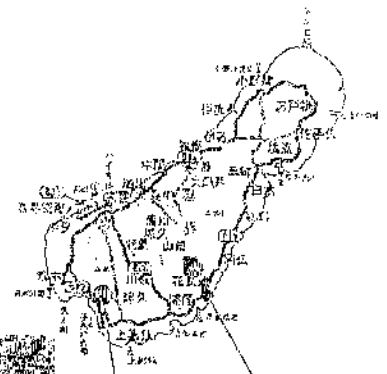


巨大ガジュマル (手久津久集落)

(喜界町)

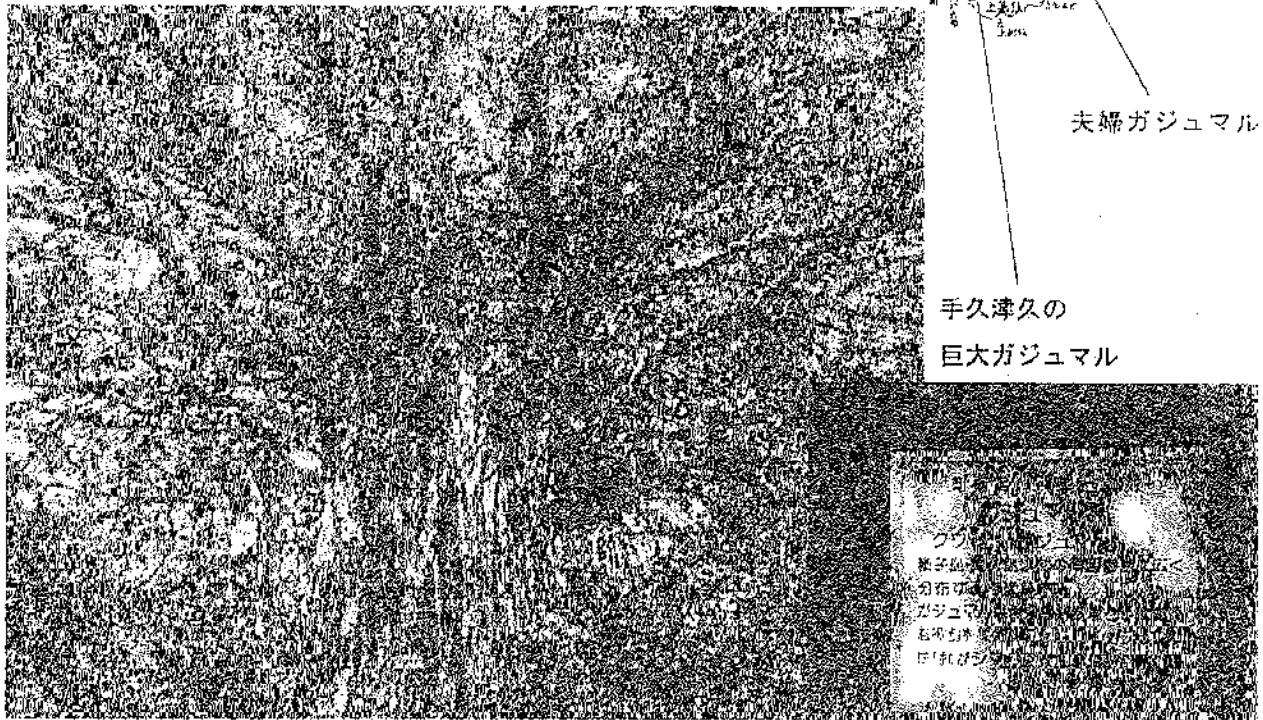
喜界島の南西部、手久津久にある巨大なガジュマル。島内至る所で大きなガジュマルは見られるが、花良治の「夫婦ガジュマル」と並び、島を代表するガジュマルである。

幹周りが約16m、高さ約18m、枝張り約42mとされ、数多くの気根が地上に根を張り、横に伸びる枝を支えている。



夫婦ガジュマル

手久津久の
巨大ガジュマル

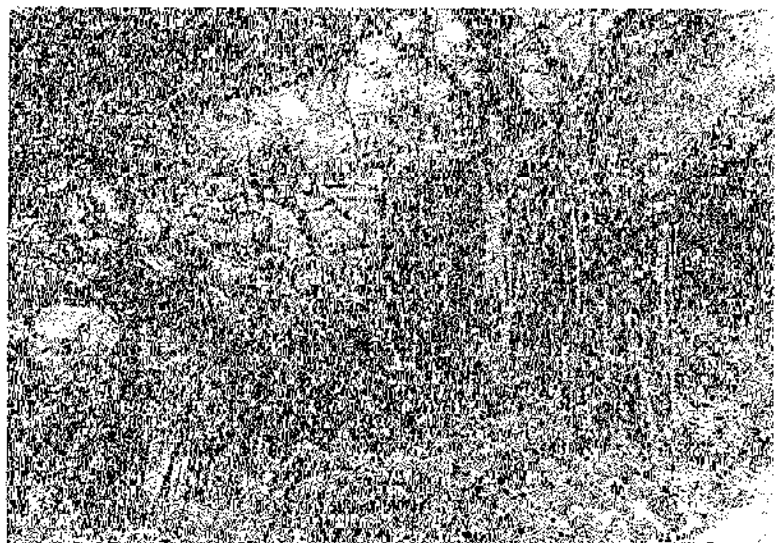


【参考】 夫婦ガジュマル

蒲生から、中西公園への上り道の中腹にある巨大ガジュマル群のなかにある。

従来は、巨大ガジュマルといえは、こちらが有名であった。

樹齢850年、樹高20mといわれ、道路の両側、周辺には同規模のガジュマルが林立し、根元にはクワズイモが群生している。



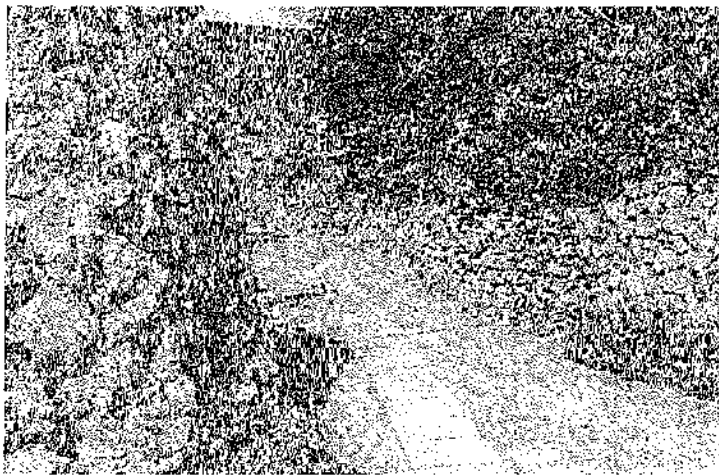
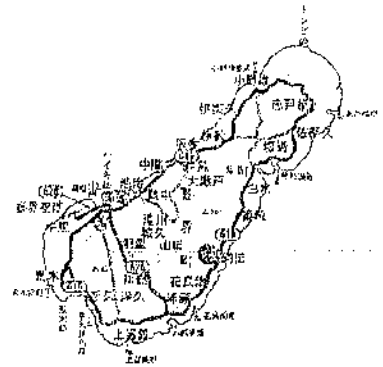
サンゴの石垣 (阿伝集落)

(喜界町)

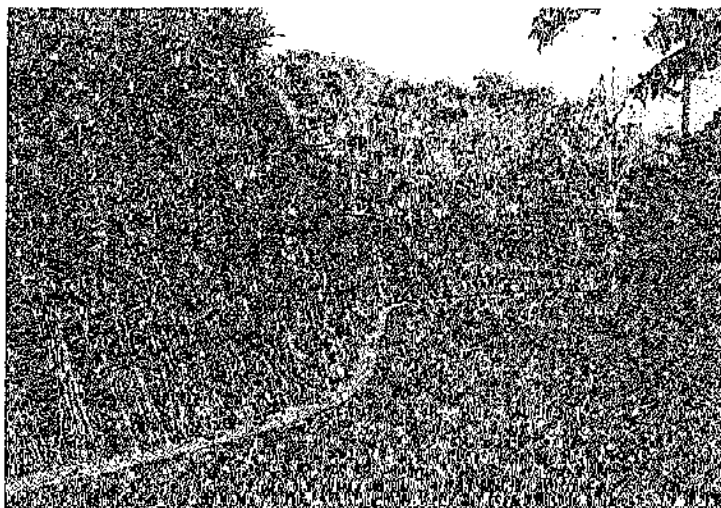
台風に備えて先入の人々は、家々の石垣をサンゴで作り、その内側にガジュマルを植え、風を防いだという。

サンゴの石垣にはよくハブが住みつくとされているが、喜界島にはハブがないため、石垣の保存状態が良く、貴重な文化遺産となっている。

島の至る所で石垣は見受けられるが、特に阿伝集落(41世帯76人)は、全体的にきれいな石垣が残っており、集落民全体でその保存に努めており、表彰も受けている。



集落内のほとんどの屋敷を囲うサンゴの石垣



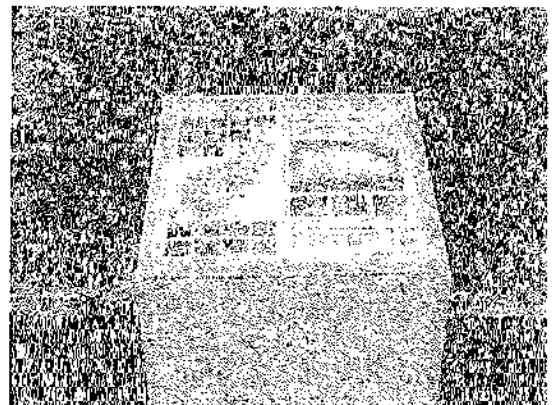
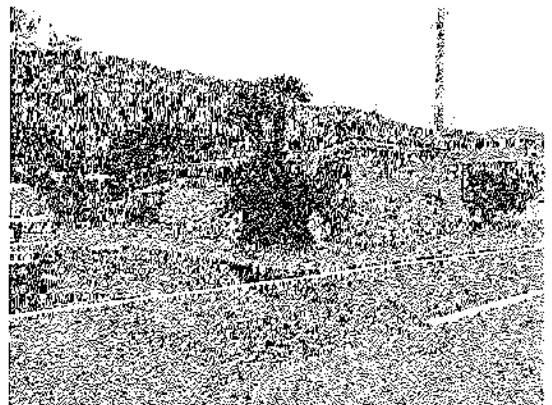
国内産の生産量日本一を誇る「白ごま」の乾燥風景
(5~6月植付、8~9月収穫)

【参考】

○魅力ある観光地づくり事業の実施

・整備内容

- ①観光客用のトイレ整備
- ②観光案内板整備
- ③観光駐車場・園路整備

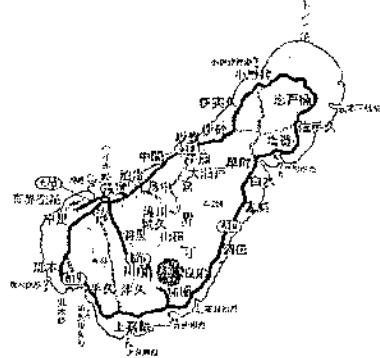


テーバルバンタ

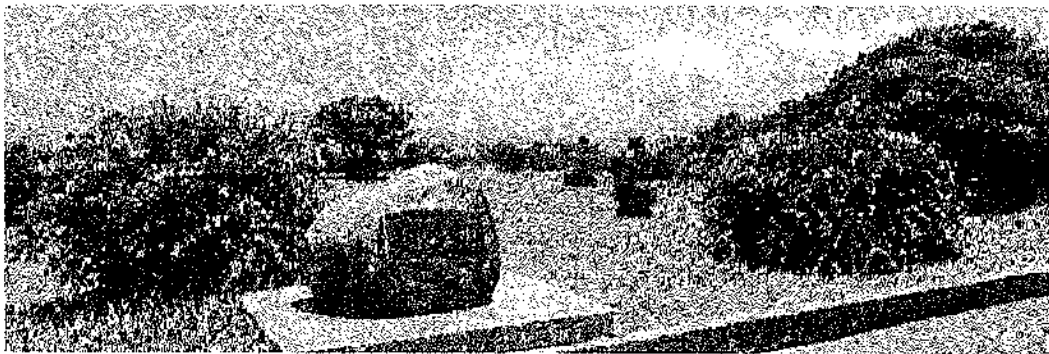
(喜界町)

喜界島を構成する石灰岩は、古くは約10万年前から造礁性サンゴが絶え間なく生き続けることにより生成された。年間約2ミリといわれる極めて早い隆起速度により、世界でも類い稀なるサンゴ礁段丘の景観を今に残している。

喜界島の南西部を見渡す中西公園周辺からは、地面ごと隆起した様子を知ることができる。



テーバルバンタ

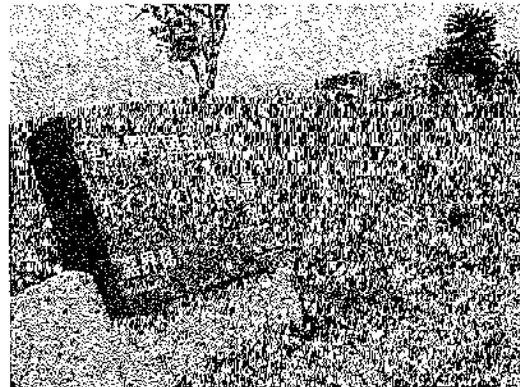
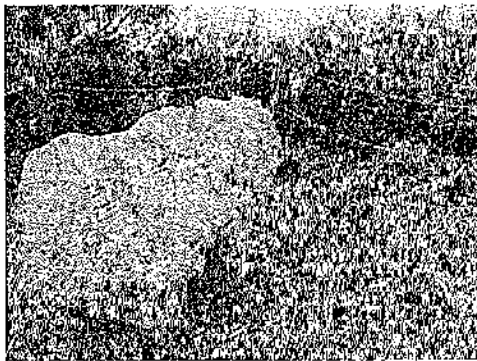
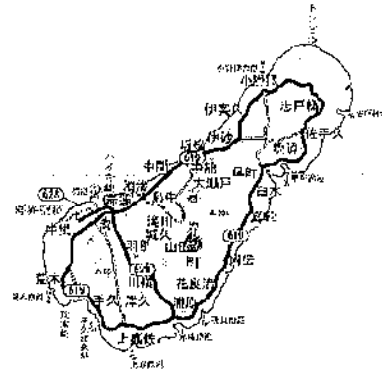


中西公園

ポイント211公園

(喜界町)

ポイント211(七島鼻)^{しちとうびな}公園は、約700haの広大な大地「百之台」の南端に位置し、年間約2.0mmという世界トップクラスの隆起スピードを誇る喜界島の最高地点(211.96m)である。



戦時中は、米軍の攻撃に備え旧日本軍の電波探知(レーダー)基地が設置され、磨田兵曹長率いる40名の兵士は敵機襲来をいち早く捉え、蔽部隊喜界島分遣隊本部(海軍南西諸島航空隊)へ報告する任務を担っていた。また、基地建設の際には、多くの女子挺身隊も動員された。現在は、パラグライダーの離着陸場としても利用され、東に太平洋、西には東シナ海を一望できる絶景の地である。

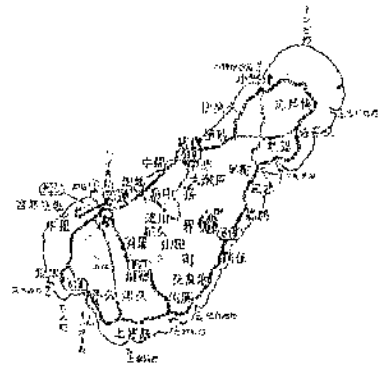


ひゃくのたい
百之台公園

(喜界町)

島の中央部に広がる標高203メートル、約700haという広大な隆起サンゴ礁の台地で、眼下には島を囲むリーフに砕ける白波と東西に太平洋と東シナ海の雄大な景観を一望できる。

奄美十景の一つでもある。

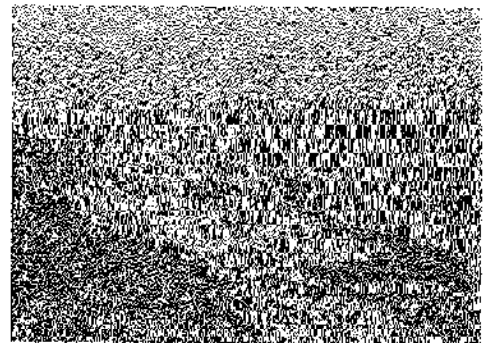


【施設整備】

- ・事業主体 喜界町
- ・事業目的 緑陰樹帯を設定し町民及び観光客の憩いの場とする。
- ・事業名 百之台地園地整備事業
(奄美公共事業) [国3/10, 県3/10, 町4/10]
- ・事業年度 昭和61年度～平成7年度
- ・総事業費 2億297万円

(単位:千円)

年 度	事業費	事業内容
昭和61年度	23,680	植栽・防護柵
〃 62 〃	22,000	〃
〃 63 〃	19,500	〃
平成元年度	10,094	〃
〃 2 〃	19,600	〃
〃 3 〃	19,400	〃
〃 4 〃	21,000	〃
〃 5 〃	23,000	〃
〃 6 〃	22,700	〃
〃 7 〃	22,000	〃
計	202,974	



展望台から北東方向



展望台から南東方向

(参考)

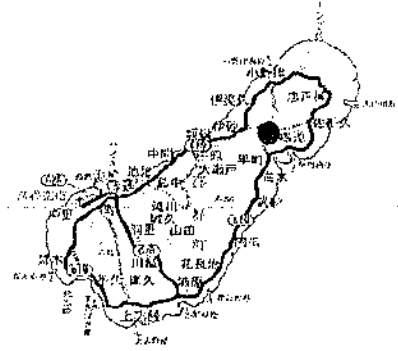
- 1 百之台は「ヒヤヌデ」が発音し、ヒヤヌとは「按司」のこと。
按司(あじ/あんじ)は、沖縄周辺のグスク(城)を拠点とした地方豪族の首長やその家族などの称号で、「ヒヤヌデ」で「按司がいる山」の意。
- 2 新・奄美十景(昭和57年 南海日々新聞社公募選考)
あやまる岬(奄美市笠利)、大浜海浜公園(奄美市名瀬)、湯湾岳から見た焼内湾(宇檢村)、油井岳から見た大島海峡(瀬戸内町)、長雲岬から見た龍郷湾(龍郷町)、百之台(喜界町)、むしろ瀬(天城町)、犬田布岬(伊仙町)、田皆岬(知名町)、百合ヶ浜(与論町)

キビ畑の一本道

(喜界町)

本農道は、畑総事業喜界東部（S49～H11）で幹線農道として事業当初（S52～53）に整備された延長1,680mの区間で、島内で一番「長い」道である。

本線を訪れる観光客も多く、物流輸送はもとより多面的な機能を備えた幹線道路である。



○ 一本道全景

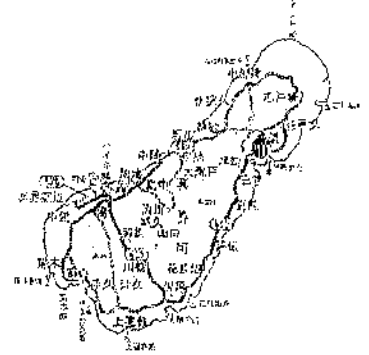


特定非営利活動法人喜界島サンゴ礁科学研究所

(喜界町)

1 設立目的

北西太平洋及び東シナ海の境に位置し、国際的にも希少な隆起サンゴ礁で形成された喜界島を拠点として、海洋、地質及びそれに関わる生物に関する調査、研究事業を行い、自然科学の発展と喜界島の経済的、社会的、文化的発展に寄与することを目的とする。(平成27年10月法人認証)



2 代表者等

代表理事長 わたなべ つよし 渡邊 剛
(北海道大学大学院理学研究院 講師)
所長／副理事長 やまざき かつこ 山崎 敦子
(日本学術振興会特別研究員)

3 所 在

喜界町塩道1508 (「旧早町小学校」跡地)

4 研究所の活動

○ サンゴ礁研究調査

喜界島を拠点に世界中でサンゴ礁調査を実施。サンゴ礁を対象とし、環境学・地質学・生物学・生態学の分野横断的な研究成果を生み出すことを目指す。

○ 海洋観測

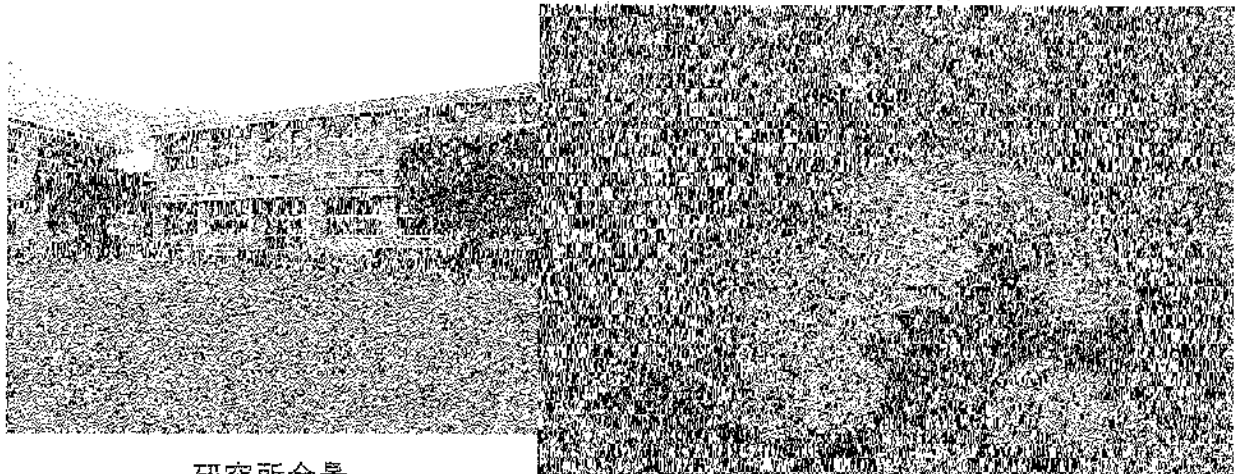
太平洋と東シナ海にまたがる喜界島で海洋観測を実施。喜界島は河川がなく、大陸・黒潮からも離れた島であり、北西大西洋のベースラインとなる貴重なデータの収集が期待される。

○ 科学試料の保管・ライブラリー

調査で得られた岩石試料・水試料を保管し、データベースを作成。研究所に保管される資料は新たな研究のために保存。また、貴重な図書資料を収集・保存する。

○ 科学教育・普及

未来の科学者を育てる活動に取り組む。また、喜界島やサンゴ礁に関する展示・セミナーを行い、研究成果を広く社会に還元することを目指す。



研究所全景

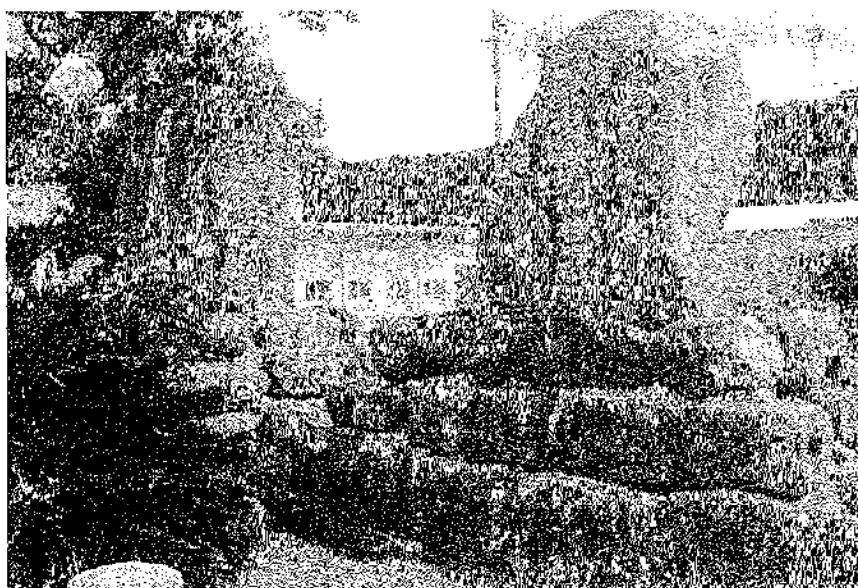
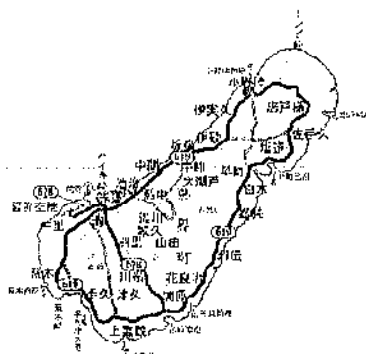
池治沖のハマサンゴ

浜上謙翠翁頌徳碑

(喜界町)

浜上謙翠は、1851(嘉永4)年1月3日、小野安民の長男として喜界町小野津に生まれる。早くに両親を亡くし、やがて湾の浜上家の養子となった。喜界島に流罪(1862年(文久2年))になった村田新八の教えを受けたと言われている。

1890(明治23)年、郡役所の勸業課長であった謙翠は、郡内の産業、特に糖業の発展に意を注ぎ、その著「大島郡状態書」には島民の生活状況や糖業の沿革、概況、今後の方針などが記されている。そして、この計画の実現には、航路をさらに開拓し、島の内外の物流によって島民の福利増進を図ることが先決と考えた謙翠は、1892(明治25)年の冬、官を辞し、海運業に打ち込み、航路開拓に尽力した。



小野津小学校敷地内の謙翠の頌徳碑

【参考】

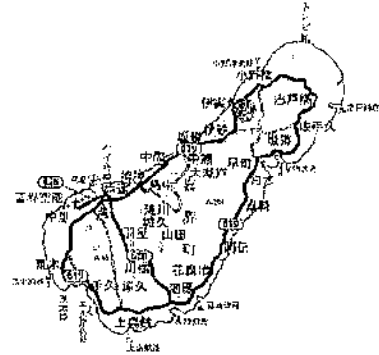
『趣味の喜界島史』には、謙翠の頌徳碑建設の経緯が述べられている。建設の機運が高まった1913(大正2)年、郡内から寄付金を募り、翌年3月26日には名瀬湾頭蘭館の地に文学博士上田万年の撰、陸軍大将大迫尚敏の題字による頌徳碑が建てられた。

前田盛秀招魂碑

(喜界町)

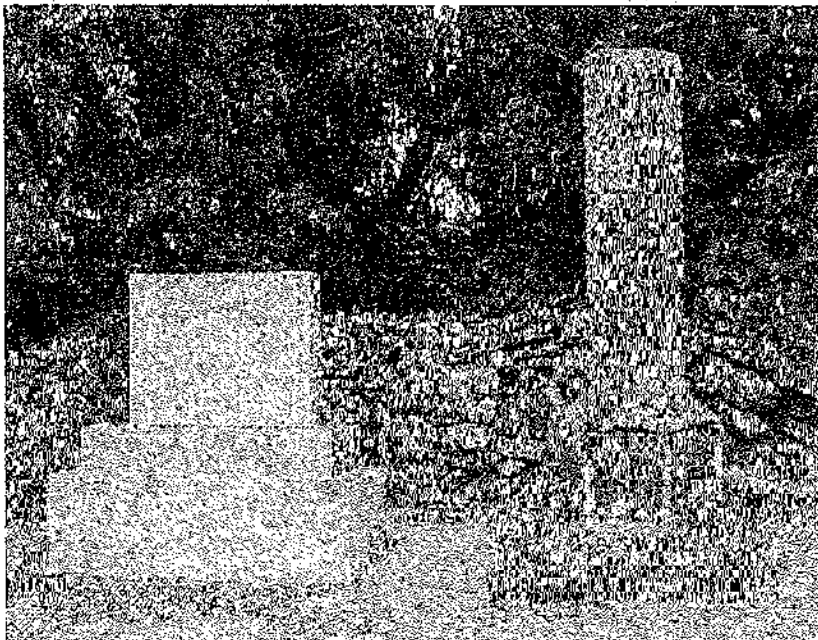
前田盛秀は、1861(文久元)年喜界町伊実久いまひくに生まれる。

村田新八の教えに心打たれ、1874(明治7年)鹿児島に上り、西郷隆盛の私学校生に。1877(明治10)年西南の役*に従軍し、3月8日に田原坂で17歳で戦死。南洲神社に葬られている。この碑は、招魂のために1907年(明治40)6月に伊実久村有志が建設したものである。



※ 喜界町からの西南の役従軍者

前田盛秀・片倉鄭龍・熊谷誠輔・乾宗英・林元俊ら



【参考】

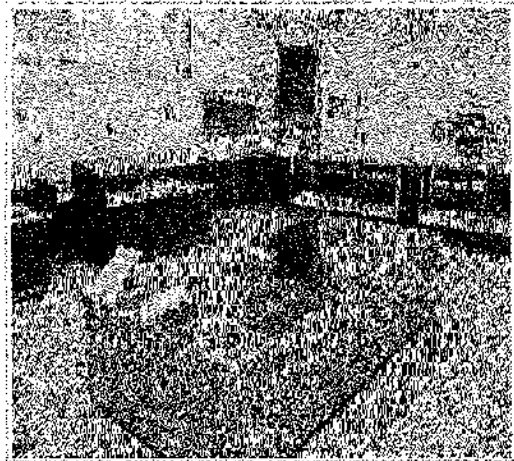
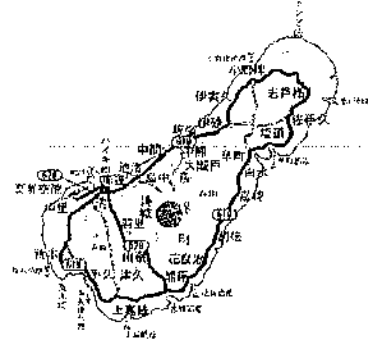
この碑は、伊実久集落の巖島神社の隣にある。招魂碑の左隣には、「戦没勇士英霊銘碑」(昭和49年9月伊実久遺族会・老人会建立)があり、西南の役、日清・日露戦争、第2次世界大戦で亡くなった、この集落出身者の名前が刻まれている。1番目に前田盛秀の名がある。

喜界町埋蔵文化財センター

(喜界町)

平成26年4月に喜界町の旧滝川小学校跡地を利用して、城久遺跡群などで見つかった出土物の調査や研究、保存活動、情報発信の拠点として開所した。

喜界町の文化財調査の拠点として、出土品の保存・調査に取り組むほか、常設展を一般にも開放しており、町内の遺跡から出土した貴重な資料を無料で閲覧できる。城久遺跡群から徒歩圏内にあり、全国各地から考古学ファンが訪れるなど、喜界町の新たな観光資源として期待されている。



(参考)

喜界町の主な遺跡群

①城久遺跡群・・・山田中西、山田半田、半田口、小ハネ、前畑、大ウフ、半田、赤連の8遺跡が立地。

②総合グランド遺跡・・・島内で最も古い縄文時代(前期)の遺跡。

③手久津久地区の遺跡群・・・崩り、川尻、中増、川寺の4遺跡が立地。

④荒木地区の遺跡群・・・カ子ンテ、荒木貝塚、クマテ、薬マシ、上才、ケブラノコシ、ケブラノ前遺跡が立地。

埋蔵文化財発掘現場(荒木地区)

(喜界町)

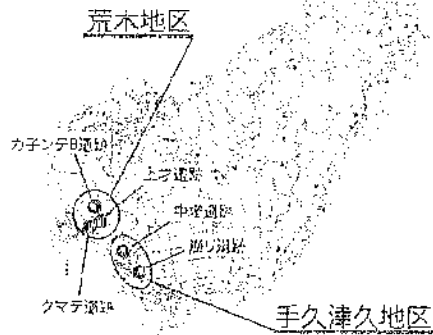
喜界町の発掘調査近況 — 主に縄文時代遺跡について — (喜界町埋蔵文化財センター)

はじめに

喜界島は鹿兒島から西に380km、奄美大島の東25kmに位置する、概して平坦な隆起サンゴ礁の島である。海岸段丘が形成され、周囲約48km、最高標高は約211mである。

畑地総合整備事業に伴い、平成22年度から手久津久地区、平成25年度からは荒木地区の本調査を実施している。特に荒木地区ではほとんどの遺跡で縄文時代の遺物または遺構が確認されている。

本稿では昨年度まで調査した遺跡のなかから、荒木地区よりカ子ンテB・上才・クマテ遺跡、手久津久地区より中増・崩り遺跡の計5遺跡を中心に近況報告したい。



第1図 遺跡位置図

1. カ子ンテB遺跡

カ子ンテB遺跡は標高25～27mの海岸段丘上に位置し、縄文時代後～晩期の遺構・遺物が確認されている。平成26～27年度の調査で、竪穴建物跡を100基以上、その他に屋外炉・柱穴などを確認した。

竪穴建物跡は台地上に帯状に広がっており、形状は方形・円形であった。ほとんどは屋内炉を備えており、中には床面ほぼ全面が焼けている建物跡も見られた。大きさは一辺3.5～5mほどがほとんどであるが、一辺が7mを超えるような大型の建物跡も検出した。これらは南島最大級の竪穴建物跡と推定され(第3図)、遺構内からは大量の土器や石器が出土した。

土器は面縄西洞式・喜念1式・宇宿上層式・犬田布式などが出土している。石器は石斧・磨礮石・石皿・有溝砥石などが出土している。石斧の中には長さ約30cmの大型品も見られる。このほかに未加工のチャートや黒曜石製の石鏃が1点出土している。



第2図 カ子ンテB 竪穴建物跡

第3図 カ子ンテB 大型竪穴建物跡

2. 上才遺跡

上才遺跡は標高30～32mの海岸段丘上にあり、カ子ンテB遺跡の南側、約40m離れたところに位置する。

平成26年度の調査で、竪穴建物跡が約20基、土坑、屋外炉などが確認できた。竪穴はほとんどがやや方形で屋内炉を持つもので、一部は床面が全面焼けているものも見られる。床面に岩盤が露頭しているものもいくつか見られるが、いずれも加工痕は確認できなかった(第4図)。

土器は宇宿上層式が多く、喜念I式・面縄西洞式が少量出土している。また台付土器の底部が喜念I式と供伴して出土した(第5図)。このほか、石斧・磨礫石などが出土している。

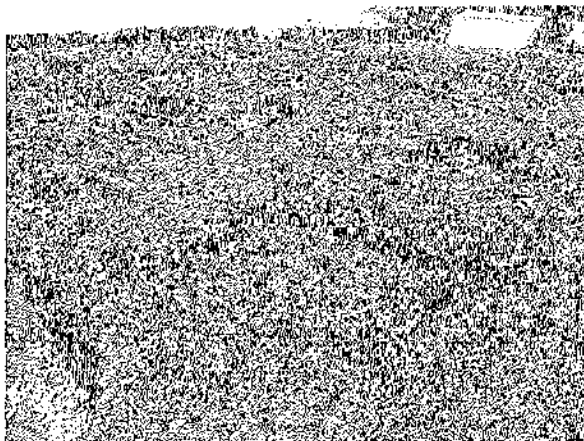
3. クマテ遺跡

クマテ遺跡は標高14～17m、荒木集落から約50m東側に位置する。平成26・27年度の調査で、竪穴建物跡が約15基・廃棄土坑などが確認されている。

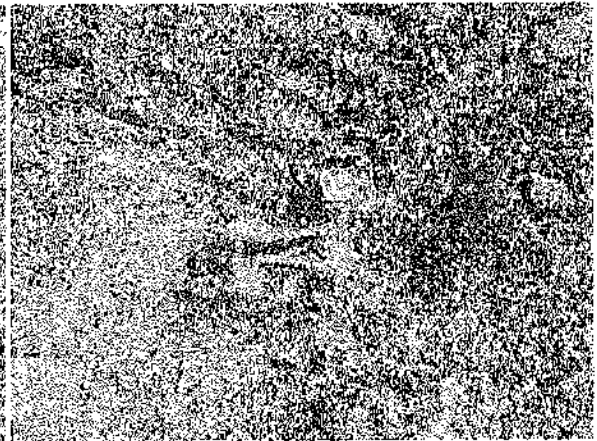
竪穴は3～4m程の大きさで、やや円形に見えるものが多く(第6図)、方形に近いものもあった。屋内炉を伴うものも見られたが、カ子ンテB・上才遺跡と比較すると少数であった。

遺物は無文土器が中心で、わずかに面縄前庭式・面縄西洞式・市来式・松山式が出土している。このほか、廃棄土坑からは無文土器の尖底の底部が出土した。石器は磨礫石・石斧の他にチャート製の石鎌が1点だけ出土している。

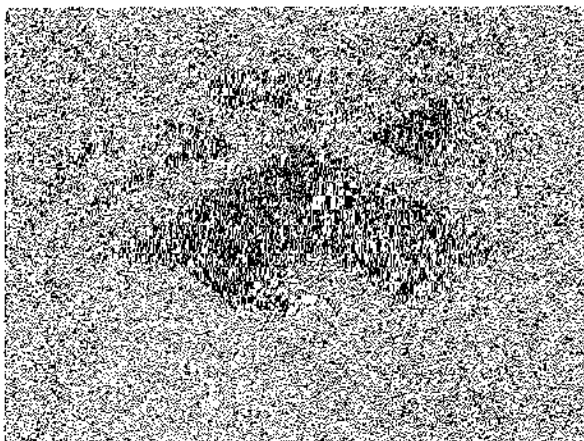
時期は異なるが、中世の掘立柱建物跡2棟や近世のサタガマ跡なども確認されている。



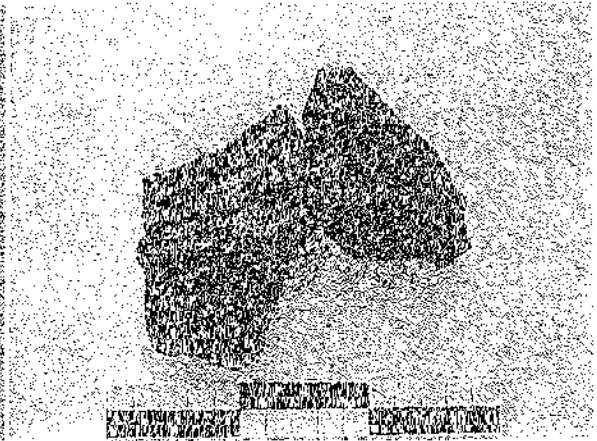
第4図 上才遺跡 竪穴建物跡群



第5図 上才遺跡 鉢形土器出土状況



第6図 クマテ遺跡 竪穴建物跡



第7図 クマテ遺跡 市来式土器

4. 中増遺跡

中増遺跡は標高約20～29m、海岸段丘の辺縁部に位置する。平成27年度の調査で縄文後～晩期の竪穴建物跡、柱跡などが初めて確認された。

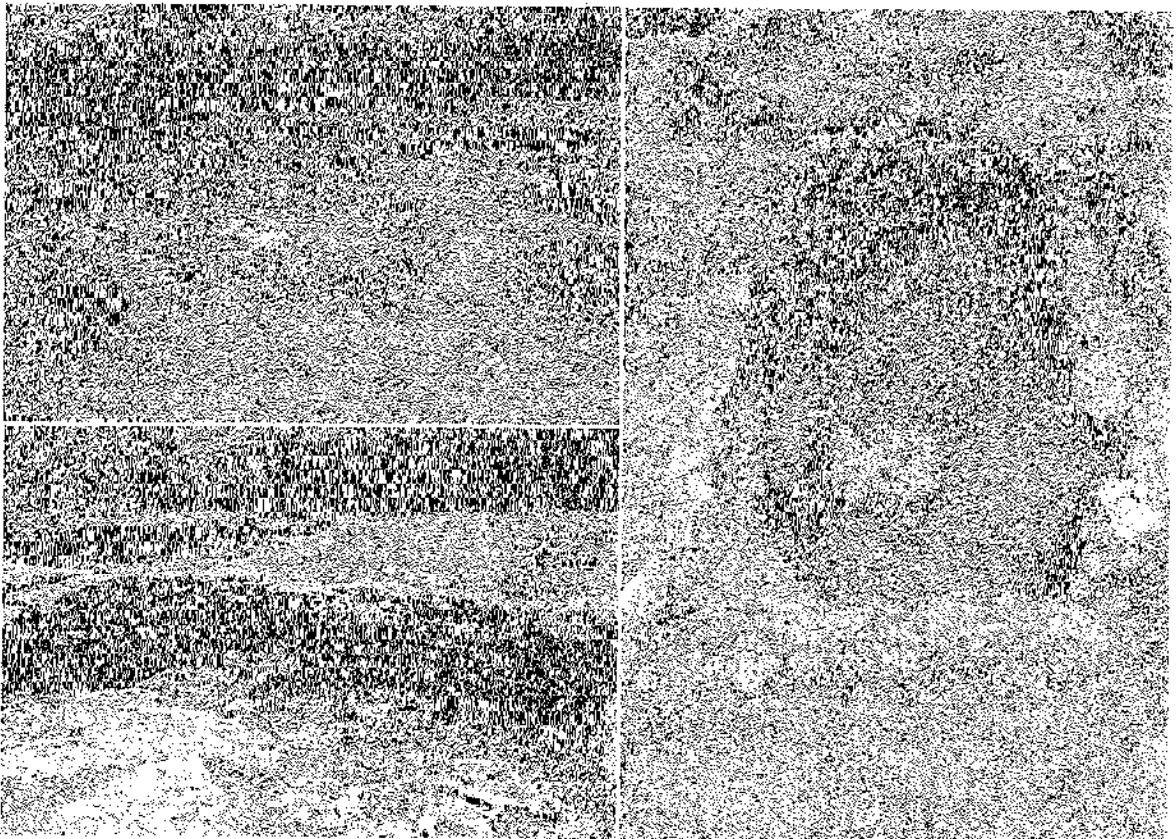
竪穴建物跡は素掘りものと石組を伴うものと二種類を確認している。

素掘りの竪穴建物跡は標高20mほどの段丘辺縁部にあり、おおむね方形で屋内炉を伴うものもいくつか見られる(第8図)。土器は嘉徳系が多く、このほか石斧・石皿・磨礫石が出土している。わずかに骨製品も出土しており、磨いた骨に装飾を施した骨製品が竪穴内から1点出土している。

石組の竪穴建物跡は、素掘りの竪穴建物跡よりやや北東の一段高い標高約25m付近の段丘辺縁部に位置しており、3×5mの長方形の竪穴が多い。サンゴ石灰岩を使用しており、自然石をそのまま利用して組んである竪穴(第9図)が多いが、配置場所に合わせてテーブルサンゴを加工し、面を揃えた竪穴(第10図)も見られた。この竪穴は角がほぼ直角で作られており、石材の加工技術や石の積み方など当時の技術力の高さがうかがえる。

石組竪穴内から出土した土器は無文土器が多く、仲原式や宇宿上層式が出土している。石器は石斧・磨礫石・石皿などが出土している。

竪穴のなかには廃絶時のままとと思われる完形の仲原式土器と長頸の壺型土器が共伴するものや、竪穴内の角隅付近には完形の石斧や石器が埋納されているものも見られ、今後の研究を深化させる資料群になると思われる。



左上：第8図 中増遺跡 竪穴建物跡群(素掘り)

右：第9図中増遺跡 竪穴建物跡(石積み)

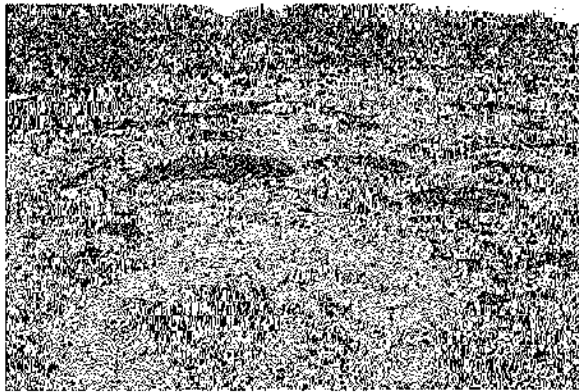
左下：第10図 中増遺跡 テーブルサンゴを加工している竪穴建物跡

5. 崩り遺跡

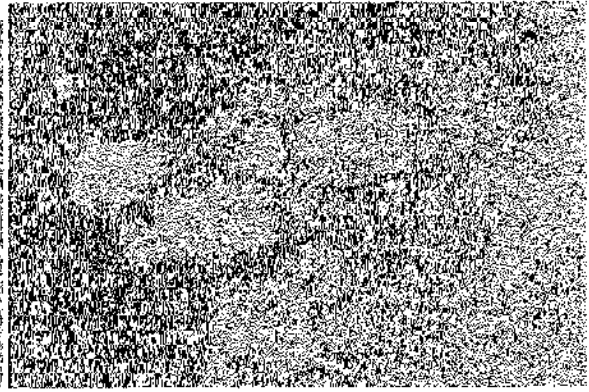
崩り遺跡は標高20～25mの海岸段丘上に立地しており、川寺・中増遺跡と隣接している。縄文時代から中世にかけての複合遺跡で、現在報告書作成中である。

縄文時代後期の竪穴建物跡が約25基確認された。竪穴建物跡は円形・方形・方形で段掘りの3種類が見られ、遺構の重複関係やこれらの遺物組成などから前後関係を把握できると思われる。

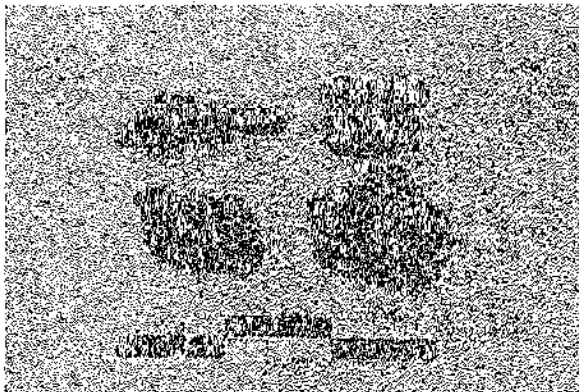
出土土器は嘉徳ⅠA式・Ⅱ式・面縄東洞式の沈線文系の在り土器と、搬入系の松山式・市来式が共存している。また出土石器の特徴として有溝砥石が多数出土していることがあげられる。



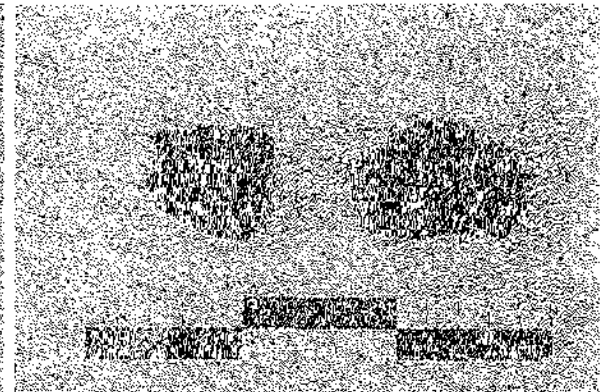
第11図 崩り遺跡 竪穴建物跡群



第12図 崩り遺跡 竪穴建物跡内土器出土状況



第13図 崩り遺跡 有溝砥石



第14図 崩り遺跡 搬入系土器

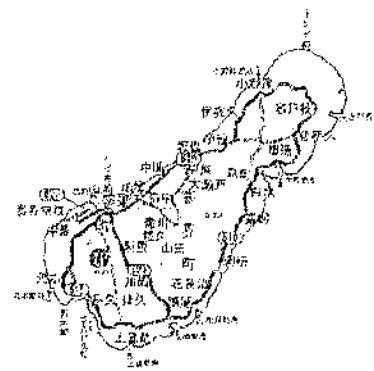
おわりに

喜界町では畑地総合整備事業に伴い、現在も年間50,000㎡以上の発掘調査が続いている。これまでは手久津久地区を中心に中世遺跡の発見が多かったが、荒木地区の調査が開始されてからは縄文時代の集落遺跡が多く発見された。特にカ子テB遺跡では100基以上の竪穴建物跡が確認されており、喜界町では最大の縄文時代遺跡となっている。また、どの遺跡でも多くの遺物が出土しており、完形で復元できそうな土器資料も多い。今後整理作業を進めていき、喜界町の縄文後期・晩期について明らかにし、報告書等で詳細を報告できるようにしていきたい。

喜界地下ダム（国営かんがい排水事業）

（喜界町）

喜界島の地形・地質等の特性を最大限に利用した農業用水資源の地下水を開発して、畑地かんがいを行うために必要な地下ダム、基幹的農業水利施設を建設・整備した。

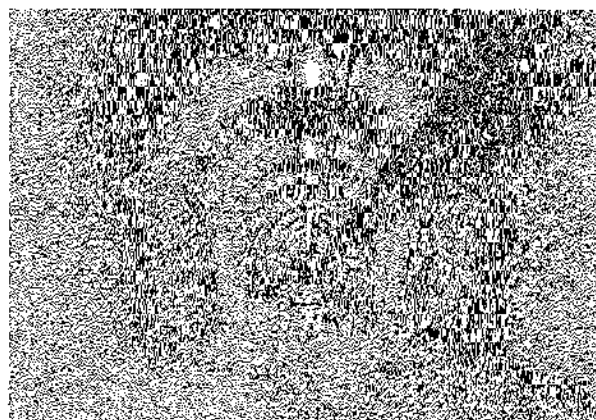


- 事業年度 平成4年度～平成15年度
 - ・ 1期工事（地下ダム）
 - 平成4年度～平成13年度
 - ・ 2期工事（パイプライン）
 - 平成7年度～平成15年度
 - ・ 受益面積 1,677ha

今までの雨待ち、雨頼り農業から計画作付けや適期かん水による収量の高位安定、品質の向上、そして収益性の高い新規作物の導入が可能となり、地域農業の発展に大きく貢献することとなった。

【地下ダムの概要】

- ・ 堤体長 2,280m（計トン補366m）
- ・ 堤高 35m
- ・ 堤体幅 55cm
- ・ 流域面積 580ha
（直接410ha, 間接170ha）
- ・ 貯水面積 180ha
- ・ 貯留体積 2,250万 m^3
- ・ 総貯水量 180万 m^3
- ・ 有効貯水量 133万 m^3
- ※貯留体積の約8%が貯留水量



地下ダムトンネル全景（366m）

- ・ 全体事業費 251.2億円
 - 1期工事：166.4億円（国：90%、県：7.5%、町：2.5%）
 - 2期工事：84.8億円（国：90%、県：5.0%、町：5.0%）

年 度	主 な 事 業 内 容	事 業 費
昭和54年度～昭和60年度	地下ダム開発調査（地形・地質・水質等）	1億33百万円
昭和61年度～平成3年度	地下ダム試験施工（技術・開発検証等）	5億86百万円
平成4年度～平成13年度	ダム止水壁、トンネル、取水施設、送水管等	166億40百万円
平成7年度～平成15年度	幹線・支線管水路、揚水機・加圧機場等	84億84百万円

- ・ 主要工事 地下ダム（1基）、取水施設（8か所）、送水管・幹線・支線水路（45km）
揚水機場（4か所）、加圧機場（1か所）、ファームポンド（6か所）
 - 1期工事：地下ダム、取水施設、送水管、揚水機場（1か所）
 - 2期工事：送水管・幹線・支線水路、揚水機場、加圧揚水機場、ファームポンド

【畑地かんがい末端施設工事】（県営畑地帯総合整備事業）

- ・ 事業費：約200億円 5地区（湾頭原、嘉手浦、嘉手浦2期、ムチャカナ、第二島中）

喜界町農産物加工センター

(喜界町)

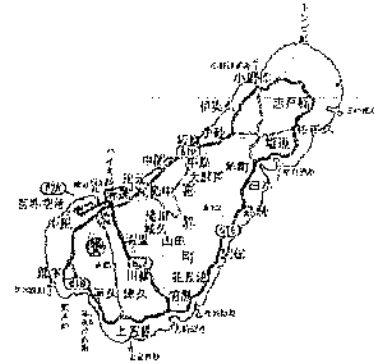
本施設は、喜界町の農産物の付加価値を高め、特産品として開発育成することにより、農業の振興及び地域の活性化に寄与する施設として、平成15年度に計画され、平成16年度に設計委託、平成17～18年度の2か年をかけて整備された。

総事業費 27.2百万円(国庫18.1百万円)

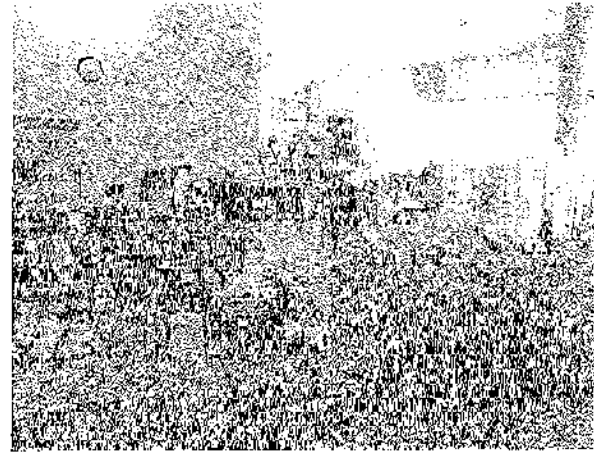
【施設概要】

- 1 施設内容
ソラマメ加工室 (50.540㎡)
ゴマ加工室 (74.907㎡)
一般加工室 (70.884㎡)
事務室 (50.540㎡)
- 2 事業内容
果樹類の果実農産物の加工及び加工品の研究開発及び販売
野菜類の果実等の農産物の加工及び加工品の研究開発及び販売
菓子類の研究開発及び販売
農産物加工に関する技術研究並びに体験研修及び交流 等
- 3 開館時間
平日 午前9時～午後5時
土日祝祭日 午前10時～午後4時
- 4 主な加工品
(商品加工) 島そら豆醤油、豆ッからー、ピリッと豆、あんだーぎ、よもぎ餅、ふくれ菓子、ゴマドレッシング、在来ミカンエキス入り、花良治ミカンエキス入りトマトピューレ、トマトケチャップ、炒りゴマ、すりゴマ

(原料加工) ソラマメ皮むき作業、ソラマメ等製粉作業、ゴマ洗浄作業



施設全景



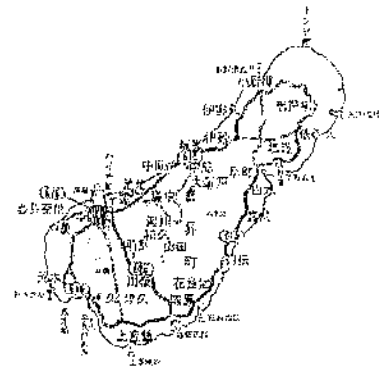
特産品展示販売、喫茶「ゆいカフェ」

(株) 朝日酒造

(喜界町)

奄美の特産物であるサトウキビ（黒糖）を活用した奄美群島だけに製造が認められている黒糖焼酎を製造している。

自社の畑で収穫されたサトウキビを原料とした焼酎の生産も行っている。

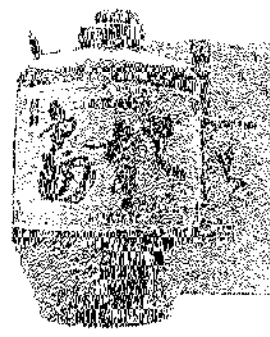


- 1 代表者 き てい ひろ ゆき
喜 禎 浩 之
- 2 場 所 大島郡喜界町湾4 1-1
- 3 創 業 大正5年2月1日
- 4 資本金 12,000千円
- 5 従業員数 14名
- 6 銘 柄 「朝日」「黒潮」「島育ち」いものじょう「呑乃釀朝日」ひのりほう「飛乃流朝日」
「南の島の貴婦人」「たかたろう」ひいず「陽出る國の銘酒」しま せん
- 7 製造工程 黒糖焼酎は、米を蒸して麴を作る一次仕込みまでは芋や麦などの焼酎と同じ製法であるが、二次仕込みに黒糖を使うところが異なる。大まかな製造工程は次のとおり。

原料米 → 洗米・浸漬 → 蒸し・放冷・種付 → 製麴
→ 一次仕込み → 黒糖溶解(糖液) → 二次仕込み(三次仕込み)
→ 蒸留 → 検定 → 貯蔵 → 瓶詰め



<朝日>



<島育ち>



<陽出る國の銘酒>

村田新八修養の碑

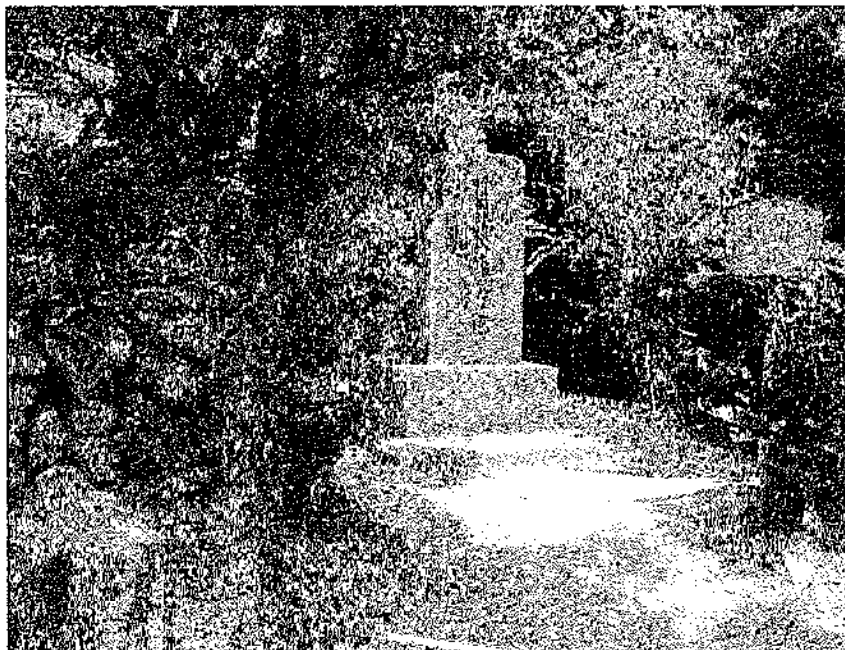
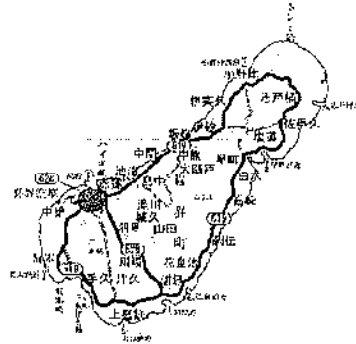
(喜界町)

村田新八は、1862（文久2）年6月10日、島津久光公の激怒を被り、喜界島へ島流しとなった（西郷は徳之島から沖永良部島へ）。

最初、代官書役の政円宅に寓居し、次に柳勇憲宅に引越し、最後に喜島桃山家（現中澤家）に移り住んだ。この築山風に盛られた碑のあるところが、生活の拠点でもあった屋敷跡である。

新八の喜界島での師弟教育は、当時の若者に大きな影響を与えた。

1864（元治元）年に赦免され、その後（西郷とともに）上京し倒幕に活躍した。



【参考】

村田新八は1836（天保7）年、鹿児島城下の高橋家に生まれ、名は経満・経磨。後に村田家に入り1877（明治10）年、西南戦争で42歳生涯を終えた幕末・明治維新に活躍した薩摩藩士である。喜界島での生活中、村田新八は島民に読み書きからトイレの使い方まで教えたと伝えられている。西郷隆盛からの信望が厚く、赦免された西郷隆盛は途中、村田新八を鹿児島へ連れ帰るために喜界島へ立ち寄っている。

俊寛の墓

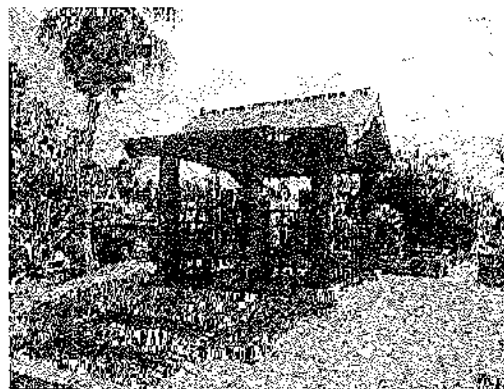
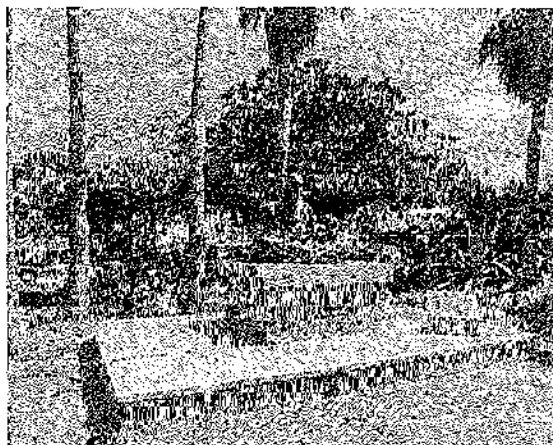
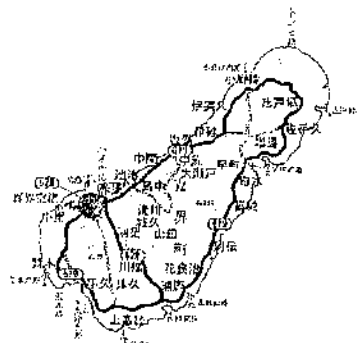
(喜界町)

この墓地付近は、昔から「坊主の前」という地名で呼ばれ、この地に俊寛僧都の墓と伝えられる墓石があり、その下から人骨及び金具と木片が発見された。喜界町は昭和50年10月当時、国立博物館の人類学部長鈴木尚氏に鑑定を依頼。

その結果、人骨については現代人の形相ではなく、歴史時代人として相当の身分の高い人物の遺骨と推定。同時に発見された立派な隅金具のついた木棺は、木曾地方に産するクロベ材と鑑定され、俊寛僧都の墓であることに自信を深めた。

京都市にある、平安博物館では、この人骨を原形とする等身大の座像を安置し、昭和60年3月24日に開眼供養が行われた。

俊寛僧侶は、1177（治承元）、京都鹿ヶ谷にて平清盛討伐謀議のかどで喜界島に遠島され、1180年（治承4）年、赦免されることなく生涯を閉じた。



【参考】

喜界町体育館の南隣に奄美独特の建物、高倉の柱を用いた2.8メートル四方の小さな建物に石灰岩の墓碑が建っている。これが俊寛僧都の墓といわれ、その前俊寛の座像が安置されている。墓は幅44センチメートル、奥行41センチメートル、高さ24センチメートルの石灰岩の台座に、幅32センチメートル、奥行24センチメートル、高さ58センチメートルの石柱が立っている。正面には文字が刻まれた跡があるが、判読できない。

えんたいごう 掩体壕

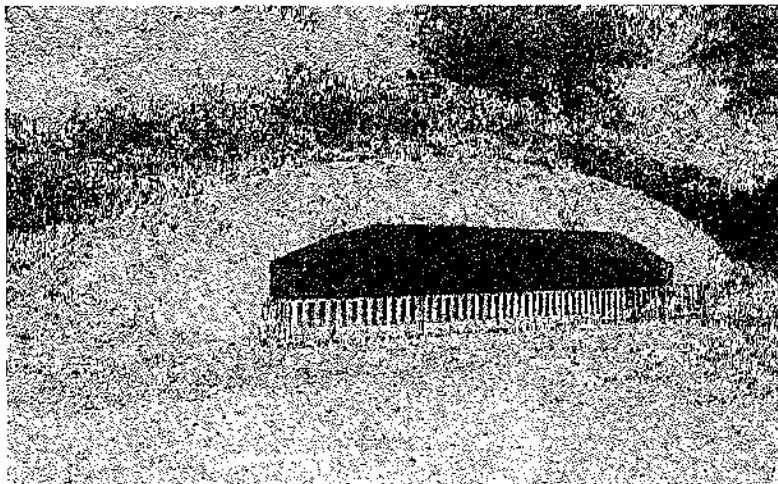
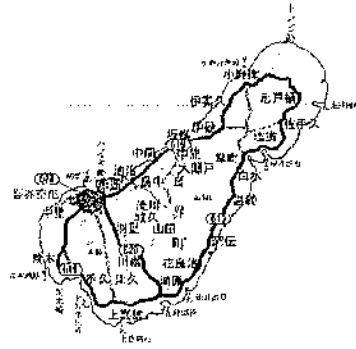
(喜界町)

えんたいごう
掩体壕とは、戦闘機を敵の攻撃から守るための格納庫である。

…太平洋戦争末期、現在の喜界飛行場は、沖縄方面の敵艦隊へと向かう襲撃機・特攻機が整備・給油を行うための中継飛行場となっていた。

当時、戦闘機を米軍の爆撃から守るため、島内の50数箇所に掩体壕が建設されたが、有蓋コンクリート製はこの1箇所だけであり、残りは三方土盛をして木の枝などでカモフラージュしただけの簡易なものであった。

なお、このコンクリート製の「掩体壕」は、主に戦闘機の整備場として使用されていた。



海軍部隊一覽

部隊名	正確な位置	陸海空 防衛部隊別	兵力		
			士官	下士官・兵	
大島防備隊派遣隊	濠部隊	喜界町山田	航空基地隊	11	204
	濠部隊	川嶺	"	4	56
	濠部隊	羽里	"	0	21
	濠部隊	中里	"	0	35
	友寄部隊	川嶺	平射砲台	3	82
	友寄部隊	65米高地	"	1	42
	友寄部隊	早町203米高地	"	1	32
	40歳洋隊	塩道	震洋隊	4	124
	111歳洋隊	小野津	"	1	124
	321歳洋隊	喜界島川嶺	砲撃隊	14	470
喜界島海軍部隊少佐以上ナシ					
計			39	1,190	

※ 「昭和20年11月1日 米第十艦司令官指示による報告書」から掲載

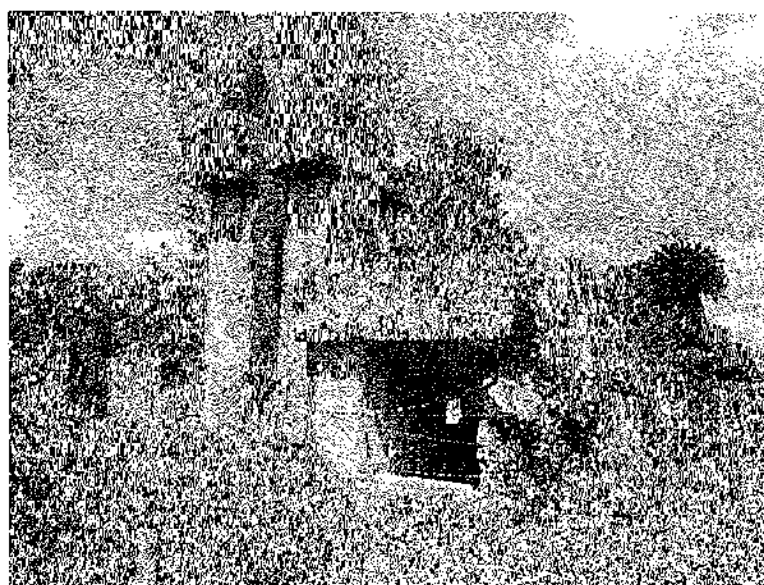
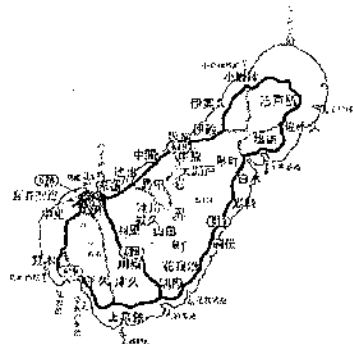
戦闘指揮所跡

(喜界町)

当史跡は、第二次世界大戦遂行のために形成され、建造物として残されたものである。

喜界島の飛行場は、海軍航空基地であり、昭和20年米軍が沖縄上陸後、戦争遂行上の最重要基地として連日連夜にわたり米軍機の猛攻撃を受けた。

薄暮本土から飛来し、翌日明け方沖縄へ飛び立つ特攻機の整備をした飛行場で、この建物の中で戦闘の指揮をしたと言われている。



【参考】

この「戦闘指揮所跡」は、軍事的な判断、指揮命令が行われていた場所で、特攻隊員も出撃前はこの場所で作戦指示を受けていたと言われている。いつ建設されたかは当時、高度機密であったため不明であるが、現存する戦闘指揮所の建物としては国内ではここに残っているだけである。